

日本の文学

36

滝井孝作
梶井基次郎
中島 敦

中央公論社

滝井孝作
梶井基次郎
中島 敦

昭和43年4月5日初版発行

昭和48年7月30日9版発行

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 株式会社トープロ
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷 株式会社トープロ
本文用紙 本州製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

滝井孝作

無限抱擁

結婚まで

慾呆け

積雪

伐り禿山

野趣

梶井基次郎

檸檬

7

138

159

169

182

193

211

城のある町にて

ある心の風景

冬の日

蒼穹

寛の話

器乐的幻覚

冬の蠅

ある崖上の感情

桜の樹の下には

愛撫

闇の絵巻

216

237

245

258

261

263

266

277

289

291

294

交尾

のんきな患者

中島 敦

光と風と夢

山月記

狐憑

盈虚

夫婦

弟子

李陵

298

304

325

407

413

418

426

434

459

注 解 年 解 挿 口 年 解 注
 譜 説 解 画 絵

山本健吉

「檸檬」

駒井哲郎

「無限抱擁」

石井鶴三

「城のある町にて」「冬の日」

「冬の虬」「ある屋上の感情」

「のんきな患者」

駒井哲郎

「光と風と夢」「弟子」「李

陵」

土方久功

滝井孝作

無限抱擁

一

一の一

浅川駅よりトンネルもなくなり空は夜明けであつた。車室の窓ぎわで一人、信一は、霽の間から麦の穂の赤んでいる有様に向いて、

「もう麦が赤む」

と呟いた。麦畠は知らぬ間に色づいている。暫時心ひかれた。彼はまた

「戻つて来たなあ」

と自分に云うた。上の電気の点っている、網棚に被り笠、糸立、岳樺の杖、(案内者が山刀で伐り取り拵えてくれた)それが脇に置いてある。

彼は温泉で錆びた銀蓋の懷中時計を、セルの袴の上へ

引き出した。新宿へ到着までにまだ一時間の余あるゆゑ、体は窓ぎわへもたれ彼は寝不足の頭を束ねた糸立へおし当てた。

浅い谷間の窓外に見える、東中野辺りで目が覚めた。車室に学生らが乗り込んでいた。

信一は池袋までの切符ゆゑ、新宿駅で降りて乗り換えをした。山の手電車の中で、彼の風変りの提げている笠が目立った。

朝曇りの空だつた。池袋の道の上を歩いて来、路端の新規に店出した小間物屋の前で、信一は齒みがきの類を買った。

いつもの雑司ヶ谷の友達の家は、空屋であつた。信一はその板戸の前で暫時へんな気がした。目白駅の方角の引越し先が貼紙に出ていた。

そして信一はまた歩いて、尋ね当てた。

原中で平屋建で、友の古びた名札が門柱に掛けてある。生垣内は三坪ほどの前栽、その雨戸は閉ざされ、まだ寝ている。

その住居は始めてで信一は、起さずに一人門の前で立っていた。信一は、ぼんやり佇んで旅行の引続きの甘い感傷に浸るのだった。曇りの空から雨の粒が落ちた。わずかに降り出し、信一は笠を提げてゐた。

銭湯を思ひうかべた。一晚石炭殻を被った気持の悪る

さ、くたびれが銭湯でぬけるなれば、自身はいろいろの仕事のある体ゆえ、すぐそれにかかれると思えた。彼は、歩き出した。

雨は本降りになり一時間ほど後、信一は戻って来た。被り笠糸立で、湯上りの彼は汗ばんだ。着物の銘仙の羽織に沁みこんでいる、温泉の香がきつく匂った。

門はまだ開かなかった。

やがて、遅く起きた中田夫婦は、信一を内へ入れた。

彼は、雨水の笠と糸立は外へ寄せかけ、上り口に袴を脱いで置いて、座敷へ入るのであった。

床の間を見て、ちよつと見ていた。白日掩荆扉とある半折の出来栄えが目についた。

中田が薄目で、眼鏡の玉をぬぐいつつ来て坐ったゆえ、彼は尋ねた。

「先生の字」

「六花さんダ。先生のところどころがっていたのを貰ってきた」

中田は同人の書の会に加わらぬ人であった。その趣味は厭だと云うて、連中を傍観していたが、これを表装しているところでは、中田もいつか一步寄って来ていた。

信一は自身の今朝新宿駅へ着いた由を云うた。まず仕事の方をともしやっておる雑誌の運びを尋ねた。

友は肯き、今日校了になるはずでもうわずかだと答え

た。信一に向き

「徳永君が心配していたゆえ、きょう逢うと良い」と云う。用向きの話はそれだけであった。

例の女の方の話、両方で口に云わなかった。

信一は具体的な考えができてないゆえ曰えず、中田は取り留めのない心やりの聴き手になれぬゆえ。

「飯にしようや」

年上の友は膝をもち上げた。

柱など節々の多い茶の間に、食卓は備わっていた。茶の間の隣の室には姿見などがある。(中田は西国の方のくろうとの女と二人暮しをして自分を立て貫き、三、四年になる。今度はごく普通の借屋住居で、二人は平凡になつて落ち着いたのだ。)

信一は自分もやがてそうなる、自分の女との暮しを思い、ここの有様に気注ぐのであった。

丸揺のかづさんも坐った。熱い飯で、やき海苔、うに、味噌汁の菜で、常の通りである。茶湯台の傍で、彼の旅先の土地の事柄が話題になった。

かづさんも、彼の事情は知っていてそれを口に云わなかった。向き合い面白くからかうにはあまり重たい男だし、また道筋をやつと通った自分ども夫婦ゆえ、いい加減は曰えなかった。

「やみそうもないナ」

信一は縁側へ起つて、空を見た。

「出かけるかな」

「うむ」

玄關でかづさんは彼の持物は

「預かっておきましょ」

と云つて、傘と足駄を揃えていた。

そうして中田と連れ立って出、信一は旅の引続きの気分はほとんどなかった。

伝通院の前で、友と別れて彼は電車を降りた。××学寮で、恩人の徳永翁に逢える。それは商用で出て来て、国の子弟のいる学寮に泊る人であつた。

信一は昨年いた寄宿舎で、知合いの学生に何気ない顔で、廊下を通つた。

彼は徳永翁と差向いになつた。彼は自分の話は田舎で打ち明け、翁は上京後諏訪の方へあて手紙を寄越してゐた。

「雑誌の方は、中田君ひとりのようじゃつたから」

質実な翁は、仕事の方を心配していた。

「え、今逢つて話して来ました。これから印刷屋へゆくはずです」

彼の問題については

「戻つて来たら、先生も自分らとともに話をしたいと云つておられた」

「はあ」

「今晚、皆で飯でもたべてだと良いな」

と云う。信一はH師に何か云われる覚悟で

「じゃ、根岸のH師の宅に来ていただきます」

とその場所を定めて云つた。徳永翁は肯いた。

十分あまりいて、信一は出かけた。

路傍にある自働電話で、彼女へ戻つたこと云おうかやや迷つたが、今日は逢えぬゆえと思ひ止つた。

例の神田の印刷所では、残り少い校正で二人いなくてもよいので、信一はまた、根岸へと向うのであつた。H師に何から話す考えは別になかつた。

(女とのゆきたてを左にざつとかく)

吉原の□屋に勤めている女——本名は松子——を二タ月前四月から見染めているのである。

四月の十日に山谷で書の方の会合が、例会でなしに酒を飲む催しがあつた。席上友達達の青舎にこんなことを頼まれた。昨日家を出たままで内へ工合悪いしこんなに飲むとまた脱線して明日中田と約束してある旅行が出来ないかも知れぬ、信一君ともに家へ来て明日旅立ちさせてくれないかね、という頼みであつた。信一は青舎の事情を知つていたゆえ、気の弱い友の用心棒になることを承知した。その晩新聞記者のSと青舎と信一の三人は吉原へ廻りお茶屋へ上つた。信一は酒飲みではないが附合

し明夕方まで青舎の連れであると思つた。青舎はその晩も帰り外れた。あくる日信一は青舎と中田との旅立ちを上野駅で見送つたが。

そんなあんばいに青舎とともに出かけて、用心棒の信一がかえつて入つたのであつた。その朝、彼女に云われた。

「お顔が、昨晚と異つておりますワ」

友の青舎は十日ほどの旅行から戻つた。信一は入谷の宅へ出向き友と顔を合わせた。旅行の土産話は胸をおどらせた。汽車の窓で見た向う山板谷峠辺の残雪の感じ。山の肌に残雪が川という字に消え残り素的な書のある線に見えた話。また羽後の酒田には仏頂和尚の書のある話。某家の古い見事な座敷造りの話。こんどの総選挙である人に一夜土地の遊郭を奢られて、翌日政談演説をした話。そして旅して気持の動いたせいで、かなり捉われない句作の出来た喜悦。それはこのごろ信一も同じゆえノートをを見せて喜び合つた。

信一は自身も話が溜まつていた。□屋へあれから三度、とことを云つて「樹木か何か揺さぶられていような」自分の心持を訴えるのであつた。

聞いて青舎は、それが恋だろうね君にその芽生えが出たんだねとわくわくした。結婚生活という話まで出ると、青舎は背かなんだが、しかし彼女の年齢——彼の二つ下

の二十二歳——を尋ねたりした。

その晩中田もやつて来て三人で浅草の方を歩いた。信一が相手の女の気持を懸念していることを曰つたら、中田は

「相手は石塊でも瓦の片でもよいよ、自身が燃えておればいつか動く」

と中田の場合かづ女は後で動いた例を持ち出した。それから

「□屋では、女のいる場所は悪いね、やりにくいね。君は思い断るかまわす突進するか、二タ途だ」

とズカズカと云う。また

「これならと思う女はそうないから、好きな女が見当ればとるのだが」続けてまた「金があるとねエ、一ト月ほど居続けして飽きがこなかつたら立派な者ゆえ、女房にするんだがね」

と、中田はあすこで五、六日も居続けしようものなら退屈で叶わないその経験談を持ち出した。

足はいつか吉原へ入り例の茶屋へ上つた。仲之町の一番外れにある茶屋だった。魚河岸××の若主人時分の青舎を見知る芸者がいて青舎は顔がきいた。女中頭の千代に信一のことを何かとたのんだり、青舎はその晩彼女を見る心組であつたが

「大店はシンミリしない。□屋は厭だ」



中田は持前を云うて肯かず、彼一人送られて往った。
ある日信一は青舎と雑司ヶ谷の中田の宅へ出かけた。

もう五月に入っていた。雑司ヶ谷で、青舎は来がけ電車
の中で見かけた女の話の云い出した。信一は引き取って
「真向いに腰掛けていた、仏像の顔のような娘さんでし
よ」

と云うてまた

「窓口から、頸すじへ日が射し込んでいたゆえ、僕はう
しろの鎧扉を閉めてあげようかと思った」

「まあ、信一さんは」

と、この細君は聞いてそう挿んだ。信一はこれまで
女などに目もくれない木強漢で通っていたゆえ。

「物のあわれを知る人だ、ねエ、いいね」

と、青舎は弁護した。信一は唐突に呟いた。

「旅行、しようかなあ」

——彼は彼女をあすから出す資力はもろろんない、

よし連れて来たにしろその暮しの道も立たない身であつ
た。どこからも資は出そうでなかった。彼の周りで一番
生活の幅のある根岸の先生もこの間「つつじの白ありた
けの金をはらいぬ」の句を作り、その清貧を打ち明けて
笑わせていたくらいである。また信一自身の心持が、ぐ
らりぐらり動揺するのだった。彼は彼女に逢うごとにそ
の実生活が分り、彼はどぎまぎした。逢始めのころはた

だ恍惚感に涵められたが、今はもつと息詰まる状態が多くな
った。しかしその重荷は浪曼的なものゆえに、彼の頭の
方向をわずか反らした折

「旅行に出ようか」

という考えが出て来た。——

その詞を聞き友達はやや面を上げた。

「旅行か、うむ宜いね」

中田は頷いて云った。信一は思い迷ったがやがてそれ
を定めた。雑誌の仕事の中田に頼んで任せた。

根岸へ廻り先生に云うこととした。——この間、先生
はその甥の受験生の不勉強の話をしたゆえ、信一は自分
の図星を指されると思い、僕もひどいことをしています
と云ったら、君はまだ純粹な方だ、と先生が云った——
信一は根岸で先生にあつて、ただ旅行したくなつたと
云った。彼は女の上は告げなかった。先生は別に理由は
きかず旅費を出してくれた。

また、入谷の友の宅へ行つた。

「そうか、本当に旅行に出るの」

「えエ」

話していて晩になり、青舎は雑司ヶ谷へ行こうと云う
て、今晚は中田に敬意を表すと常談口で細君に着物を出
させ、信一を伴うて門に出た。当時彼はここから吉原の
裏門へゆく近道を「十五分間小怪」と名づけていたが、

その道の方へ友の足は向き、オヤと思つて信一は続いた。
「立つ前に逢つた方よいねエ、自分も今晚は、見るゆえ」
友の甘い味わいを彼はうけ入れた。

「君は、女の人が僕をどう見たかを、たずねるのだね。
君と女の人と見方が似るか。わかるからね」

「では、今晚女のいうことを、出先で手紙に書きます」
「逢つた工合で、旅行は、変わるかも分らぬねエ」

「えエ」

翌日彼のところへ青舎の端書が届いた。啓、昨日の私は言葉も行いもすこし脱線気味のところがあつたようですゆるして下さい御旅行は決定しましたか是非そうなさることを祈ります深く祈ります今日は朝からからだの工合がわるかつたのですが今はよくなって仕事しております。

信一は岐阜で約束の手紙を書いた。出立際に逢つても引き留められるほどでなかったが、友は別れて旅立てと云い寄越した、彼女の印象が悪いかと思えた。青舎の返事は田舎へ来た。

ゆうべは根岸の俳三昧でしたこのごろはあなたが出席されていないと淋しい心持になりますあしたは私の家もう一夜は三の輪の三昧私はこの淋しい心持を続けねばなりませんね

あの時の第一印象はお目にかかる形式がへんなもの

であつたのでめっちゃめっちゃになってしまいましたあの私が私を外的ではありますがかなりよく見ておられたので驚きましたいや驚くというのは仰山のようですが私からは第一印象の外的だけでも握み得られなかったからですどうも私というものが時に臨みてしつかりすることが出来ないのを恥じます

それでこのことはこれだけにとどめておきたいと思ひますあなたとして定めてはがゆいように思われましようがどうか忍んで下さいそうしてこのことについては考えないで下さい色をつけないで下さい

あの部屋で病人のようだと申し上げたのを氣にかけて下さいますな何んでもないのでしたんにあの時の感じに過ぎないのです

さだめしお淋しいことがおありでしょう万々お察しいたしますどうか大事に旅行して下さい

一昨日徳永君へはがきを差し上げましたそれは内容は申し上げずにただ信一君の今の心持をやすらかにして上げていただきたいというようなばつとしたことを申し上げたのです万事あなたが徳永君に御相談でもされる場合のきっかけにでも思つたからです

先生へは私が話をしました先生の心持は良好です御安心なさい

たよりを書くということは気をまぎらすものです

たよりを下さい徳永君に宜しくお伝え下さいこれで捌筆しますどうも言い足りないのですが

五月六日

青 舎

——□屋ではお附合いで上った客には女を逢わせない極りの由で、青舎はわずかすれ違いに相見た。あの晩部屋は扉とよぶ西洋間で、彼の寢床の傍に皆が付き添うていて「病人のようだ」の詞が出た。そこへ、彼女が新造と下新をつれて入って来、友は起って出て往ったのであった。彼女は友達のことを「新規さんですわ」と云うた。シンキなる詞が呑み込めず何度も尋ねて、若々しい人当世風、という意味が分った。青舎はすていな瑞々しい人ゆえ、その方面が第一番に映ると思えた——

青舎の手紙を徳永翁に見せた。徳永翁は商用で月末に東京へ出る由であった。

彼女の手紙が岐阜から廻ったのとともに二通来た。

昨日はきれいなはがきありがとうございましたまあ長良川という川はずいぶんきもちのよさそうな川ですわねわたしとあなたと長良川とやらに手に手をひいて旅行することもあることでしょねあたしそれをたのしみにして待っておりますわ、お手紙はきょうたしかに拝見いたしました益多屋のお千代さんからもよろしくと申しましたおハガキはたしかに御らんになりましたたそうです、あなたがお立ちになってから早いもので

すわねもう五日にもなりますわねずか五日やそこいらでもあたしずいぶんたったと思いますすわあなたお里方へいらしておやご様がさぞおよろこびでしょねあたしもうれしゅう存じますまた古里ですぎた前のことをお思いでしょうねそしてさぞおなつかしきことでございましょうねあなた旅ゆえおからだをおきをつけて御無事でね、まずはお返事まで 十六日のひる前にてあなたの松子 たびの信さま 返事かく心はゆく御もとへ わが心は……

そんな風に信一は旅行に出て二十日ほどの日数、旅行の楽しみは脱がさず味おうていた。そして旅行で得た楽しみで、心持は幾分明るくなっているのであった。

(如上の出来事があった)

根岸に行くと、いつもの鏡ノ間を通って、一足下りる能舞台の裏側の座敷——その書斎の真中ほどに、H師は一閑張の机を据えていた。

信一と顔を合わせて、先生はうむと肯いた。

彼は坐って、旅先で出来た俳句をまず見てもらうのであった。清書する暇なくて句稿のノートのままさし出した。

一応目を通して先生は「どうも弱いね」

そして具体的に云った。